

好み、余は、兒童を親愛すと自ら、唱ふる人も往々之あり、これ、もとより、保母たるに幾分の資格ある人といふべきも、單に稚き者を愛すといふのみにては、尙足らず、幼稚者の一人々々に對して、時々刻々、よく各個の兒童と親密友愛の同情を表し、常に之を愛憐することの感覺を與へて、兒童をして、各其保母を愛慕し日々保母の面を見んことを欲して之を其父兄に切望する程の愛情を兒童に發せしめて始めて、保母たる人の第一の資格を得たる人といふべきなり。

且又、保母は單に兒童の教師たるにあらずして、兒童の遊び相手なり。幼稚の園に遊戯して、知らず識らず自然に、其感化力を兒童の上に及ぼすものなり、故に保母の第二の要件は兒童の最嗜好する音樂に長じて、其唱歌其舉止其遊戯皆よく自然に音樂の調律に相和する如きもの多からんをのぞむなり。樂器の使用に

熟せず唱歌の技に通せずして唯に兒童の世話をなすのみを以て保母の任を全うしたりと思ふは大なる誤なるべし。此他、前に述べたる諸學科の要領に通すべきは云ふまでもなきことなり。

是を以て保母たるべき資格を備ふるは即ち母たるべき資格を備たるものと云ふべし。而して余は世の婦人に向ては、皆よく、幼稚園保母となりうべき準備をうけて、以て、賢母となり得べき資格を有せられんことを切望するものなり。

### 幼兒に課する唱歌遊戯の話

#### 伊澤修二

考へて見れば、丁度、今より二十六七年前、明治七年頃、まだ我國に幼稚園と云ふものがなかつたのです。が、其ころから私は唱歌遊戯を起す必要を感じまして

フルベッキ氏から、或教育書をかりて讀んで見て、始めて、フレーベル氏が、大教育家であつて、子供に唱歌遊戯を授け、子供のアクティビティー……活動性でもいふですか……を養ふを主義として居ることを知り、そこで、我日本の學校にも、之れを起すが必要である」と云ふ考から、私が當時の役目たる愛知師範學校長として文部省へ左の件を建議したのです。こゝに明治八年に出た文部省の第二年報があります。此中にでてゐます。

將來學術進歩に付須要の件(其中の一節を掲載す)

唱歌、遊戯を興すの件。唱歌の益たるや、大なり。第一、知覺神經を活潑にして、精神を快樂にす。第二、人心に感動方を發せしむ。第三、發音を正し、呼法を調ふ。以上は幼生教育上、必ず、缺くべからざる要旨の概略を掲ぐるのみ、其細目の如きは喋々、此に辯せ

ず、我文部省早く此に見ありて、小學教科中唱歌を載すといへども、未、實に其科を備ふるものならず、今我輩、西洋に於て著明なる教育士、フレーベル氏、其他、諸氏の論說に従ひ、先、本邦固有の童謠を折衷して二三の小謠を製し日を重ね年を積ひて大成全備の効を奏せんことを期せり、即其一二列を示す。

唱歌は精神に快樂を興へ、運動は支體に爽快を興ふ、此二者は教育上、並び行はれて偏廢すべからざるものとす。而して運動に數種あり、方今體操を以て、一般、必行のものと定む。然れ共、年齢幼弱、筋骨軟柔の幼生を激動せしむるは其害反て少からずと、是れ有名諸家の説なり、故に今下等小學の教科に遊戯を設く、即左の圖に依て其一二例を示す(圖略す)

椿(唱歌)

椿や椿、椿の花が開いた、中の心まで開いた、椿の花

は萎む時もあらうが、開けた御代は、八千歳の春までも萎む時はあらじ。

### 技 態

此戲は群兒五分の一を椿の心として中央に躡まらしめ相互に手と手を連ね合ひ肩摩固結せしむ、他の兒も亦、此の如くして花心の外圍を回繞す、花心の兒、同聲に、椿や椿と音頭を揚れば衆兒之に次で亦同し句を唱ふ、椿の花が開いたと謠ふ時、衆兒和唱しながら起つて、一大圍隊を爲す、萎む時も云々と謠ふ時、先の如く密合一踏す、開けた云々謠ひながら大小圍の形をなし謠ひ終れば一拜して止む（至幼の遊戲とす）

### 胡 蝶（唱歌）

蝶々蝶々、菜の葉に止れ、菜の葉に飽いたら櫻に遊べ、櫻の花の榮ゆる御代に止れや遊べ、遊べや止れ。

### 技 態

右の手と右の手とを取りかはして、向背相反し兩兒を一蝶とす、凡そ十五名に一羽、三十名に二羽はぎを度とす、衆兒は互に手と手とを引き合ひ一大圍を作りて輪走す、彼蝶は私轉しながら圍外を公轉す、圍兒と蝶兒とは逆旋すべし、二羽ならば左右に位し四羽ならば四隅に位し、一齊に唱吟し出るを期して轉旋を始むべし、且つ謠ひ且、走りて結句の止れと云ふ詞と共に出遇ふ所の圍兒の取り合ひたる手を執ふべし、執られたる者を再度の蝶とす

地球の自轉して太陽を周回するに倣ふ、地動説を教ふるに及んで比喩の一助たらんことを要す。

地動説など言ふことは、まだ、此ごろ、頗る、めづらしいことでしたから、こんなに附説してゐるのです。

夫から、もう一つは鼠の歌と遊嬉とですが、これは、虫の子は、非常に喜んでやりました。

鼠(唱歌)

矢を取ろ、矢を取ろ、大矢を取ろよ、野中に射込んだ

大矢を取ろよ、内はホラ〜。外はズブ〜鼠の窟に

御匍入ハイイなされ、火は燃過モエスギて、御矢は御手に入べし。

命矢を取ろ〜鼠御匍入なされ、御矢は御手に入る

べしと幾度も疊謠すべし。

技能

一兒を大己貴命に擬し一兒を矢に擬し衆兒を鼠として

二人づゝ手を引合ひ、一人を容るべき程の間隙を開き、

矢になりし、兒を中に置き圓形に圍繞して輪轉す、命

になりし兒は園外に在りて、同じく輪走しながら矢を

取る〜云々大矢を取ろよと謠へば、鼠等一聲に内は、

ホラ〜云々御匍入なされと云ふにつれて、其間隙よ

り入らんとすれば入らせじと身を寄せ合せて之を禦ぐ

こと定數なし、幾度も謠ひ返して、終に入り得て、矢

の兒を執ふるを一閃とす、其匍入はいどれたる左右の兒、一

は命となり一は矢となるを再遊の式と定む。

古事記云、鳴鏑射入大野之中令採其矢故入其野時、

即以火廻燒其野於是不知所出之間、鼠來云、内者富良

々々外者須夫々々如是言故蹈其處者落隱入之間火者燒

過爾其鼠昨持其鳴鏑出來而奉也(此文に准ふ)

即古事記にあつた所から取つて此遊を造つたのであ

ります。下等小學と云ふのは、丁度、今で申すと、尋

常一、二、三年に當りますが、この時代には、まだ、

幼稚園の教がなかつた故、最下級には學齡未滿のもの

をも入れ、今日の幼稚園の如き仕事をもしたことで

す。

其後私は、政府より、師範學科取調を命せられ、明治

八年に米國へ行つて、夫から十二年に歸つて來た時は、

時勢一變し、非常に歐化主義が盛になつて、特に唱歌

の如きは非常の大革新をなし、何でも西洋の長音階でなくてはならぬと云ふこと蝶々蝶々の歌の如きも、前に愛知師範學校にて造つた詞に西洋のライトロウ、ライトロウの曲調をつけて試みた所が、至極よくはまつた故、遂に之が用ゐられて今日まで傳はつたので、是も實は、私が米國在學中にメーソン氏と相談して爲した仕事であります。

然るに其頃女子師範學校でやつて居たのはどうであつたかといふと、これは又、大變な古風で幼稚園の唱歌遊戯等は、頗る極端の古體をやつて居ました。即其ころあつた歌は、例合ば、民草の榮ゆるるときと苗代に、水せき入れて、みしめ細ゆたにひきはへやつかはのたりほの稻のどしわらんなどの如く、古調の歌を古語で作つて、音律等も全く日本古代の律旋に取つたので、子供の考よりは寧ろ、白髮の歌人と樂人との考に従ひ之

に擬古的の舞の手をつけた様なのでした。此事については、自分も大に疑を存して居ましたが時勢の然らしむる處でせうか、數年間、こんな古調のが續いて、其間、子供の同情、子供の快戯等は認められなかつたのです。一方では、自分等の方の歐化主義があり、二者とも極端と極端とが成立して居つたと云つて、公平な評でせう。民草の曲調などは、當時の校長さんが、或俗人に注文して、作らせたのですから、大變な古調で、且音調の高い所はズット高く、低い所はズット低くなつて居る、之で以て歌はせたのですから考へて見るとあの時分の子供は、無理な試験をされたので、誠に可愛想なものでした

そこへ、以て、メーソンが來て、「一つとや」や蝶々蝶々などの歌を、恰も、子供の音度に適する調子を以て歌はせたもんですから、さあ、此子供の喜は大變な

もので、眞黒になつて、メーソンの側へ集まつて行き  
ましたがこれは、尤のことです。

然るに今日になつては、時勢が一變し、唱歌遊戯等もな  
るべく、子供に適し言葉も曲も、なるべく簡單なるもの  
になつて居るやうで誠に結構なこと、思ひます。又一  
方では、非常な歐化主義も、段々日本主義と融化して  
眞個の教育的唱歌遊戯も生産すべき時代となり、一時  
すたれたる日本の古傳説や童謡に基づいて、子供の歌  
謠遊戯等を作り、又其曲も日本風に作るこの研究を  
なさんことを唱導する者も出てきましたのは、甚、喜  
ぶべきこと、思ひます。

要するに、フレール、其他の教育者のいへる如く  
唱歌遊戯等は大人の氣に入る譯ではなく、子供の心情  
にたち入り、子供の樂となり、子供の爲になるもので  
あるべき眞理は變らないのです。かく私が述べたのも、

いさゝか古さを尋ねて新しきを知るの材料にもならむ  
かと存じて御咄いたしましたわけでありませう。



## 研究

### 教育の眞義

石井國次

實驗心理學の證明する所によれば人は皆自然に快を求  
め不快を避くるものなり胎兒の運動嬰兒の活動より小  
兒大人の行爲に至るまで其間衝動的本能的無意識的意  
識的等の區別はありとも要するに人類一切の行爲は皆  
快を求め不快を避くるにありといへり。

この事はニウトンの發明したる引力の定義の如く自然  
に斯くあるなり人類は皆此法則を脱する能はずといふ